

若手研究者としての第一歩 —第1回 研究との出会いとドイツへの関心—

この度、研究推進委員会よりお誘いをいただき、「若手研究者としての第一歩」というテーマのもとに今回を含め全3回のコラムを担当させていただくこととなりました。どうぞよろしく願い致します。これまでのご担当の錚々たる先生方につづき、研究というものに関わってきた時間はもちろん、現場での経験値も皆無に等しい私がコラムを執筆することは大変身に余る思いではございますが、お付き合いいただければ幸いです。

ただ、そうした中でも本コラムの主たる想定読者様である若手研究者の皆さま、さらには今後研究へ携わっていくことを想定されている方々に対して、これまでで一番近い立場に当たるかと思えます。先生方のコラムのように、経験に基づいた助言というものは到底お伝えできませんので、私自身が研究初学者であるからこそ見えてきたこと、感じたことについてお話させていただこうと思えます。

今回の第1回に関しましては、おおよそ自己紹介になってしまいますが、「研究との出会いとドイツへの関心」として、現在に至るまでの経緯をお話しさせていただきます。これ以降、第2回には「大学院における研究と気づき」と致しまして、若手研究者として研究を進めていくうえで大学院生活、とりわけ修士段階において重要であると感じたことについて、そして第3回では「若手研究者助成を通じた研究」と題し、今回研究推進委員会よりコラムのお話をいただいたきっかけでもございました、本学会の40周年記念若手研究者助成とその助成期間内に行ったドイツへの実地調査に関して執筆予定でございます。

それでは本題に移りますが、現在私は博士後期課程1年生として大学院に在籍しており、研究というものに触れ始めてからは7年目ということになるのかと思えます。恥ずかしながらキャリア教育という言葉を知ったのは大学入学後で、現在も私の師である藤田晃之先生との出会いが大きな転機となりました。

私の育ちは愛知県瀬戸市という場所(かつては「せともの」の街と紹介していたのですが、すっかり棋士の藤井聡太さんの出身地で話が通じるようになりました。)なのですが、早期よりキャリア教育に注力してきた自治体であったことを大学入学後に知ることとなります。私の中学校時代は平成20年頃にあたりますので、職場体験活動に関しては大学の同級生それぞれが似たような経験を持っていた一方で、社会人講話やワークショップなどの活動に関しては、「1回ぐらいあったかな・・・」といった反応がほとんどでした。その瞬間に限

っては「そういうものなのかな」と感じたようにも記憶していますが、自身にとっては当たり前であった多数のキャリア教育の経験が、世間にとっての当たり前ではないことに気づいた瞬間こそ、研究という世界に対してより明確な関心を持つきっかけであったように思います。

学部時代においては、自身の経験のもとにキャリア教育に際した地域連携という点に着目し、日本国内の事例を対象に研究を行いました。その中で、例えば瀬戸市の特長として、職場体験活動においては商工会議所が学校と事業所の仲介を行い、円滑な機会確保に努めている実態を知ることとなった一方で、日本の多くの学校では職場体験活動に際した「事業所探し」は教員負担となってしまうという課題も見えてきました。

そうした気づきを通じ、課題解決のヒントを求めて海外に目を向けたとき、ドイツとの最初の出会いがありました。職業情報センター（BIZ）と呼ばれる、長期に渡って連邦全域で機能してきた機関はその1つであったといえます。現在では、パソコンやスマートフォンの普及、あるいは職業カウンセラーの学校への駐在化も要因の一つとして、BIZという場所自体の機能はやや衰退傾向にあるようにも思えますが、当該センターを管轄する連邦雇用エージェンシー（Bundesagentur für Arbeit）のもと、日本の職場体験活動あるいはインターンシップに相当する企業実習（Praktikum）の実施に際して、生徒自身が職業に関する興味を確認し、実際に機会を確保できるようなシステムが運用されています。ただし、上記のような日本のヒントとなり得る実態がある一方で、制度的な違いや「職業」の位置づけ方の特徴等、日本とは同様の観点で捉えることの限界もあるため、現在もなおそうした課題と向き合っている最中です。

こうしてドイツのキャリア教育について研究を進めていく中でも、やはり学部時代に抱いた当時の問題関心は、現在でも根幹に据えられているといえます。若手研究者としての期間、あるいはその先も研究を進めていく上での土台となり得る要素は、私の場合、過去の経験から見えてきたものでしたが、そのような「身の回り」の状況に目を向けることの必要性に対してようやく意識的になってきたように感じますし、これからも大事にしなければならぬと強く思います。

（筑波大学大学院 藤田駿介）